

## 肥後掬の栗形における熊本藩形式と八代藩形式

肥後掬の栗形には、熊本藩（細川家）と八代藩（松井家）に違いがあることを、伊藤満氏から教わる。

徳川時代の大藩は、家老クラスでも万石以上の大名並みの石高をとっていた。細川家にとっての松井家（八代城主三万石）、加賀前田家にとっての本多家（五万石）、尾張徳川家にとっての成瀬家（犬山城主）、紀州徳川家にとっての安藤家（紀伊田辺城主）などである。当然にこれらの家には多くの家臣が存在していた。

伊藤満氏によると、熊本藩では、細川の家来と松井家の家来が、聞かなくてもわかるようにしていたらしく、その目印がこの栗形の形とのことである。

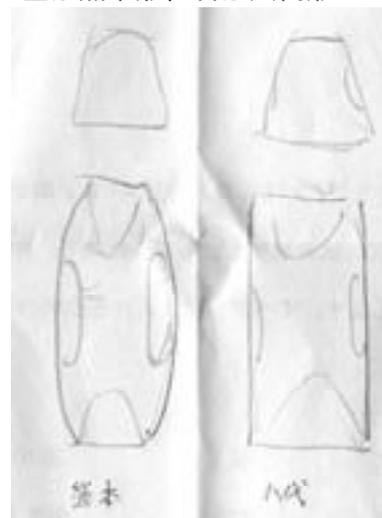
ちなみに、松井家の家来を細川家の武士は「又家来」と呼んで差別していたと伝わる。旗本が自分達は將軍直参であるとして、大名の家来（各藩の藩士）を陪臣として差別していたのと同様と思われる。

伊藤満氏から、違いがわかる写真の提供を受けたから説明したい。

上段が八代形、下段が熊本形



左が熊本形、右が八代形



手書きの図も、伊藤満氏を書いてくれたもので、特徴がわかりやすい。

すなわち、八代形は栗形を上から見ると長方形なのに対して、熊本形は長丸形の先を切ったような形（舟形）になる。

また、横から見ると、八代形は上部が平らになるのに対して、熊本形は上部が小山のようにもっこりする。